
高校生日本語教師

Jun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生日本語教師

【Nコード】

N0347Y

【作者名】

Jun

【あらすじ】

吉田龍一は、ごく一般的な高校2年生。父親の転勤で、オーストラリアの高校に転入することになる。そして、あるきっかけから、日本語を教えてほしいと頼まれる…

はじめに

小説「高校生日本語教師」をご覧頂きありがとうございます。作者のJunと申します。

私たち日本人は「外国語」と聞くと、最初に思い浮かべるのは「英語」ではないでしょうか。中学校から学び始め、高校や大学でも勉強する方も多いことでしょう。今では、小学校でも「外国語教育」を必修科目としたことから、外国語の代表？である「英語」を選択する小学校が多々あります。

更に街中を歩くと、様々な英語表記が目につきますし、英会話スクールや英語の教材などの広告が、テレビや新聞、インターネットあるいは電車の中づり広告などにあふれ返っています。多くの広告で学習者や顧客を増やそうと、様々なキャッチコピーが使われています。

確かに中には効果的な物もあるでしょう。しかし、はたして本当に有効な学習法なのかはたまた詐欺まがいの学習法なのか判断に悩むこともあるかと思えます。これらの判断基準として、荒川（2004）は、「これがもし、日本語を学びたい外国人のための宣伝だったらどうだろうか」と考えるべきだと述べています。私もこの意見に賛成です。以前、家で取っていた新聞広告に「1日10分3か月英語を聞く」といった画期的な？学習法が紹介されていました。荒川（2004）の述べるように、もしこれが「日本語をほとんど話せない外国人が、毎日10分日本語を3ヶ月間聞いて、話せるようになるか」と考えれば、おのずとその効果のほどが分かるのではないのでしょうか。

これを見て、「でも日本語は世界一難しい言葉だから…」などと思った方。そんなことはありません。それは、思い込みに過ぎないのです。私も現在、地元のボランティア教室で外国人に日本語を教え

ています。しかし、日本語が「世界一難しい言葉」とは思えません。多くの外国人学習者が、レベルの程度こそあれ、日常会話を無難にこなしています。言葉の難易度は、対比する言語と比較して決定されますし、日本語は比較的「やさしい」部類に入るのではないかと思います。

意外かと思うかも知れませんが、日本語の音声は非常に少なく単純ですし、文法もきわめて規則的で例外がほとんどない言語と言えるでしょう。つまり「会話」をする面では、極めて簡単な言語だと言えます。一方で、何故日本語が非常に難しい言語だと言われているのかといえば、「文字」がひらがな・カタカナ・漢字と3種類あり、ひとつの文ですべてが出てくることが。敬意表現が複雑で、敬語も「尊敬語」「謙譲語」×2種類、「丁寧語」そして「美化語」と分類され、さらにそこに「ウチとソト」の関係やコンテキスト(文脈・空気)といったものに大きな影響を受ける言語であるからではないでしょうか。ここで、紹介した内容は後々物語の中で取り上げ、あるいはコラムとして説明・解説していく予定です。

この物語では、高校生の吉田龍一よしだりゅういちがオーストラリアに家族の都合で編入するところから始まります。また物語で使用される教科書はスリーエー・ネットワーク社の『みんなの日本語初級?・?』とさせていただきます。これは私の所属するボランティア教室で、おもにこの教科書を使って授業しているからです。普段も使用している教科書の方が、仕組みやポイントなども分かりやすいので、何卒ご理解のほど、お願い致します。

最後に、この物語は私にとって初めての作品となります。その為、ストーリー上様々な矛盾やつたない表現、あるいは更新が大幅に遅れる事もあるかと思いますが、何卒暖かく見守って頂けると嬉しいです。

平成23年11月12日作成

はじめに（後書き）

引用..

荒川洋平（2004）『もしも…あなたが外国人に「日本語を教える」としたら』スリーエー・ネットワーク 17頁

訂正…教科書はスリーエー・ネットワーク社の『みんなの日本語』です。

投稿前にチェックしたつもりでしたが、本日改めて読み直して、誤ったタイトルになっていたため、訂正いたしました。（11月15日）

第1話 思いがけない噂

よしだ りゅういち
吉田龍一は、県立高校に通う高校2年生だ。入学して以降、ごくありふれた高校生活を満喫していた。そして、外国にあこがれる一方で、英語は全くの苦手で、先週行われた一学期期末テストの英語答案を見て固まっていた。

（赤点は免れたけど、マジでギリギリ…）

龍一は内心ホッとしたのと同時に自己嫌悪のようなものを感じていた。

（このままの英語力では、夏休み以降マズイ：なんとかしなくちゃなあ…だけど、今週答案返却があって、再来週終業式で夏休みか）

夏休みに特に何をするわけではないが、やはり休みとなると嬉しい。散々な期末結果を受け取りつつ、なぜか国語だけは学年最高点をたたき出した龍一は、友達から遊びに誘われたが、（本人も行きたいが）断って、いつもより早めに帰宅した。なぜなら、母親からこんな意味深なメールが届いたからだ。

大変なことになったから、学校終わったらすぐ帰ってきて

絵文字もなく常に事務的な母からのメールを受け取り、言われた通りすぐに帰って来たのだ。一体「大変なこと」とは、何なのかと考えながら家に向かっていると、スーパから出てきた近所のおばさんから声をかけられた。

「あら？龍一君。オーストラリアに引っ越すってホント？」

「はあ？オーストラリアっすか？なんで？」

「詩織ちゃんから聞いたんだけど…お父さんの転勤だって…」

「へっ？」

詩織は龍一の妹だ。今年中学2年生になった。

頭にいっぱいの「？」を浮かべながら、とりあえず家に向かう。その間、ほんの数メートルだが、先ほどと同じような質問を周りからされ、ますます困惑する。一体、なんでこんな変な噂が立っちゃったんだろ？そんなことを考えながら、いつの間にか家についていた。

第2話 父の転勤

「ただいまー」

龍一は玄関を開けた。とりあえず、先ほど聞いたオーストラリアの件の真相を確かめなければならぬ。家に入ると妹の詩織が部屋から出てきた。中学生とはいえ、まだあどけなさが残る。

「あつ、お兄ちゃん。おかえりー」

龍一は噂をばらまいているであろう張本人に、事の真相を確かめる。「詩織、さっき隣のおばさんから、オーストラリアがどうのこうのって聞いたけど、ありや何だ？」

「あ、もう知ってたの？お父さんオーストラリアに転勤だって…」

「はい？あの、冗談は短ければ短いほどいいんだぜ？」

「別に冗談言ってないよ。私もさっきお母さんから聞いたんだから…」

別にからかわれている訳ではなさそうだ。詩織もいたって真剣に言っている。

「マジ：で？」

「マジだもん」

そんなやり取りを入口でやっていると、再び玄関が開いた。

「何だ、お前たち。そんなところで話してないで中入ったらどうだ？」

まさに噂をすれば影、渦中の父親が会社から帰ってきた。

父親は某中小の商社に勤めている。今年、オーストラリアに拠点を新たに作る人材として、転勤が決まったそうだ。引っ越し費用や子どもの学費等も、現地で必要なものはすべて会社側で負担してくれる条件も提示された。ただし、日本の学校に残る場合は、その分のお金は出ないらしい。

そして、来月（8月）中旬に現地へ引っ越さなければならないそう

だ。現地の高校は9月から始まる為、会社の方で転入する手続きをしてくれるそう。ただし、クラスはESL(English as a Second Language)である。これは、英語を母語としない人たちが集まるクラスであり、1日に何回かはこのメンバーで勉強することになる。ESLと留学生は別物だ。留学生は自分の意思で、英語を勉強しに来るためある程度の英語運用能力も求められる。一方ESLは家族などの都合で、ある意味やむを得ず現地に入学することになった正規の学生である。つまり、英語があまり出来ないのを前提としているのだ。妹の詩織も中学校で同様にESL生として転校することになる。

英語力もなく、龍一は日本に残ろうとしたが、やはり会社からの援助が大きく影響し、結果的に押し切られた格好だ。はたして、これからどうなるのか。

第3話 出発準備（前書き）

読んでいただきありがとうございます。今回はまだ、日本ですがそろそろ旅立ちが近付いてきました。

第3話 出発準備

衝撃的な事実を知った翌日、龍一は高校の担任に退学と転校の事を話した。

「あの、先生。今学期一杯で学校辞めます。」

「なんで？」

「えっと、オーストラリア行きます」

「えっ？どして？」

「家族に押し切られた…」

やはり、担任もあまりの事態に言葉を失っていたようだ。ちなみに龍一の担任は、英語担当。当然、中学レベルの英語力も無いことを知っている。周りからも、一体どうしていくことになったのか、英語力は大丈夫なのかと散々聞かれた。いや、聞かれなくとも自分の英語力は皆無に等しいことくらい、龍一にも分かってるし、そもそもなんでオーストラリアに行く羽目になったのかも、自分自身でさえ理解出来てないのだ。説明できるわけがない。

父親の会社の人が自宅に来て、色々転入に関する書類（全部英語だし）を作るのを手伝ってくれて、その他パスポートの発行、就学ビザの申請など行った。

準備の最中、留学経験のある親戚の叔父さんが、「向こうで日本語教えるかもよ」と、一冊日本語の教科書を渡された。叔父は留学時代に地域コミュニティに溶け込む為、日本語をボランティアで教えた経験を持っていた。今では、家の近くで行われている「日本語教室」で、ボランティアもしている。

教科書（しかも新品だ）を1冊譲ってもらった龍一だったが、本人がほしいのは日本語の教科書ではなく、英語の教科書なり参考書な

のだ。もらった時に、パラパラとページをめくるだけはしてみたものの、中身は一切見ずお礼だけ言って、荷物の中に放り込んだ。

（英語を覚えるだけでも手一杯なのに、日本語を教えるなんて無理だろ…）

まあ、時には日本語が恋しくなるかもしれないから、持っていくかくらいにしか思っていなかった。

そして、間もなく出国の時が近づいていた。

第4話 入国許可とある騒動（前書き）

3日目で100アクセスを超えそうです。ご愛読ありがとうございます。

今回はようやくオーストラリアへ到着ですが、ちょっとしたトラブルが…

第4話 入国許可とある騒動

龍一・詩織と両親は、成田空港の出発ゲートにいた。今まで住んでいた借家は解約し、不要となったものは、リサイクル店に持っていくなどして処分した。オーストラリアに持っていくものは、着替えなどの生活必需品と本などである。ただし、本も荷物になるので後に航空便で送ってもらうことになるだろう。龍一はかなりの読書家だ。主に小説を中心に読んでいるため、その読解力が国語だけ最高点をたたき出せる源になっているのかも知れない。ただし、勉強用の参考書籍は大の苦手で、小説以外には普通に漫画を読んでいた。詩織は英語が比較的得意なようだが、それでも中学2年生レベル。龍一とあまり変わらない。彼女も漫画は大量に持っていて、それも航空便で送られてくる。

長旅が過ぎて、ようやくオーストラリアのシドニーへたどり着いた。ただ、入国審査で父がちょっとしたトラブルに巻き込まれる。それは荷物チェックで不審物などがなければ調べる時であった。

父親と係官が何やらもめている。英語はよく分からないが、別室に送られたようだ。1時間ほどして、父親がうんざりした様子で戻ってきた。

「どうしたの？」

とりあえず、聞いてみる。

「いや、参ったよ。なかなか納豆分かってもらえなくて…」

「納豆？　そういや、日本出るとき買ってたような…」

「ああ、こっちにあるか分からないからな」と父。

「で、納豆の何が問題だったの？」　妹の詩織が入ってきた。

「どうやら、納豆を見たことがなかったらしい。で、連中腐っているみたいだからって、没収しようとするんだからな…」

「で、結局返してもらえたの？」龍一が聞く。

「ああ、目の前でひとつ食べてやったら、返してもらえたよ。けどなあ、白いご飯と一緒に食べたかった。まあ、連中食べてる俺見て、いやーな顔してたけどな」

父は大の納豆好き。いや、和食全体が好きといった方が正しいか。

なんとかハプニングを乗り越え、ようやく入国許可が下りた。どうやら、これから先、まだまだ波乱がありそうな予感。

第4話 入国許可とある騒動（後書き）

今後は週に1－2話のペースで書いていこうと思います。今後もしくお願いします。

第5話 J A F L C i t y (ジャフル市) (前書き)

お待たせしました。第五話の投稿です。

第5話 J A F L C i t y (ジャフル市)

「お、結構あったかいじゃん。」

「と、いうよりも暑いくらいだよ」

龍一の発言に詩織が反応する。

オーストラリアは南半球なので、8月は真冬。その為、吉田一家は、空港を出る前にセーターとコート、それに手袋までした完全防備体制だ。ところが、シドニーの気温は思っていたより暖かいものだった。ぽかぽかと日差しがあって暖かい。日本で言う小春日和とも言える気温だ。

確かにこの陽気で、これだけ真冬の恰好ではむしろ暑いかもしれない。

“Excuse me, Are you Mr. Yoshida, sir?”

へすみません。吉田さんですか？

ひとりの中年男性が、父親に話しかけてきた。

“Ah, certainly, yes. Well, you are…”

へええ、そうですが。あなたは…

父も英語で返す。

“I, m Michael M Corner. I am a staff of ABC Company. I, ve been waiting for you.”

へ私はABC社のマイケル・M・コーナーと申します。お待ちしていました。✓

どうやら、父親の会社関係者のようだ。

その人の用意したタクシーで走ること1時間、J A F L City（ジャフル市）にある外壁の白い家の前でとまった。どうやら、龍一たちの新居らしい。2階建てで下はリビングダイニングとなんと6畳の和室が。2階は洋間が3部屋ある。とりあえず部屋割は、広い部屋を両親でひとつ。龍一と詩織は1部屋ずつに決まった。家に着いたのが14時過ぎだったので、とりあえず、ご近所へのあいさつと町探索に行くことに：

「あー、良かった。家の近くに日系スーパーがあつて。」母はほっとしたように言った。家の周りを色々見て回ると、この新居が本当に立地条件が最高だと思った。家から右に5分ほどの所にスーパーがある。当然、日本の食材は売られていない。しかし野菜や卵などは日本の物価からすればかなり安く手に入りそうだ。反対方向に10分ほど行くと、日系スーパーがあつた。値段は現地の店と比較して割高だったが、日本人の日常食が大量に売られていた。焼きそばやカレーのルーといったものは勿論、米・パン・麺といった就職敬、醤油・みりんといった調味料など、日本でふつうに手に入るものがすべて売られている。

「それにしても、ずいぶんお客さん多いよね。」詩織が誰に言うわけでもなくつぶやく。

「そうね。まあ日本食もおいしいから」母も頷く。

どうやら、日本食ブームがすこし起きているのかもしれない。日本食Ⅱ健康食のイメージがあるようで、どうやら繁盛しているようだ。しかも店内には、英語だけでなく日本語表記もいくつかあった。例えば「カレー」というカタカナ。何かと思って見てみると「カレー」の事だと気づく。さらに衝撃だったのが「ソヌー」なる調味料。いや、これは「ソース」のことである。思わず失笑してしまう父と母。それにあっけにとられているのが龍一と詩織だ。これはあまりにひどい。

取りあえず、米10キロとその他野菜を買って、帰ってきた。これ

からも奇妙な日本語表記と付き合うことになりそうだ。

第5話 J A F L C i t y (ジャフル市) (後書き)

J A F L 市というのは、筆者の作った架空の都市です。

J ∥ J a p a n

A ∥ A u s t r a l i a

F ∥ F r i e n d s h i p , F o r e i g n

L ∥ L a n g u a g e

など、このストーリーに関係しそうな単語を思い浮かべ、それを並べ替えた結果、J A F L 市になりました。

オーストラリア(シドニー)の8月平均気温は、最高気温18℃なので、日本ほど冬も寒くない見たいです。

S o u r c e ∥ A l l A b o u t

<http://allabout.co.jp/gm/gc/78087/>

これからもこんな感じで、週に数回の更新になると思いますが、今後も宜しくお願い致します。

感想や評価を頂けると嬉しいです。

第6話 初登校（前書き）

更新遅くなって申し訳ないです。

今回からようやく学校生活がスタートします。はたして、どういった高校生活になるのか：

※読者の方はすでにご存じかと思いますが、今回の舞台はオーストラリアです。ということは、公用語は当然英語です。しかし、日常会話まで全て英語で書いてしまうと、日本人の方を対象に書いているので、それは難しいものがあります。また、前話までのように英語と日本語訳を併記する方法も、厳しいものがあります。（↑本当はただ単に面倒くさいだけb y本音）

そこで、基本的な英語での日常会話も、日本語表記で書かせていただきます。その際、日本語での会話と区別するため、カッコの表示を変えます。

日本語での発言は「」を今まで通り使用します。

英語での発言を日本語で表記する場合はへゝで表します。

例..

「私は日本人です。」と表記されていれば、これは日本語でそのまま発音したものです。

へ私は日本人です。ゝと表記されている場合は、I a m a J a p a n e s e . と言っているものを、そのまま直接日本語表記していることになります。

そのほか、

英語での発言が重要な場面では、英語と和訳の併記

相手の英語を聞き取れない・意味が分からない場合は英語のみあるいは片仮名で聞こえた通りに表記します。

今回からこのルールで投稿しますので、何卒ご理解のほどよろしくお願いします。

作者

第6話 初登校

今日は龍一にとって、J A F L 高校に初めて通う日だ。この日までに家庭教師と会い、簡単な日常会話ならある程度こなせるようになってきた。ただし、勿論普通の授業について行くのも厳しいので、家庭教師を兄妹で付けることになった。外国人の生徒はそれがある意味当たり前のようだ。

龍一は J A F L 高校の1年生として編入することになった。当初は2年生からの予定だったが、やはり言葉の壁や単位の問題から1年生としての方が、無難だろう。詩織は2年生からである。やはり中学と高校では違うのだ。

龍一は1年生のクラスに所属すると同時に E S L の正規生徒でもある。E S L とは E n g l i s h a s a S e c o n d L a n g u a g e の略で、英語を母語としない生徒向けの外国人専用クラスである。詩織も J A F L 中学で同様の立場だ。

前置きが長くなったが、今朝は転入初日だ。

「とりあえず、おにぎり作ったから。はい、お弁当。」

「あー、どうも。」

龍一は母からおにぎり3つ入った弁当を受け取る。具は「鮭」「梅」「昆布」みたいだ。

食材は自宅近くのあの奇妙な日本語表記があるスーパーで購入できる。表記はおかしいが、種類と量・質はかなりいいものを売っているのだ。当然、お値段も他店舗と比較して割高だが…

へすみません。今日から転校する吉田ですが…

龍一は門で学校の警備員に声をかけた。

「ああ、それじゃこっちに来てくれ」

警備員の男性は1階にある事務室に案内した。書類を何やら確認するとヘリユーイチだね。時間割はもう決まっているから、それぞれの教室に行ってもらって、大丈夫ですよ。✓

龍一はそう言われると、美術室へ向かった。絵を描くだけなら英語をあまり使わなくてもいいだろうとの考えから選択したのだ。どちらにしても、先生の言っている事はほとんど聞き取れず、フラフラになって1時間目の教室を出てきた。

さて、次はE L Sのクラスだ。このクラスは、英語を母語としない外国人向けのクラスなので、少しは聞きとれるかもと期待して、ドアを開ける。

「へろー」

教室に入ったが誰もいない。

ま…まあ、まだ休み時間だしね。うん、ちょっと早く来すぎたかな…などと、ひとりごとをいう。

しばらく席に座って待っていると、2時間目開始のベルが鳴る。

あ…あれ？誰も来ないの？ひょっとして部屋間違えたか？

そう思って心配していると、教室のドアが勢いよく開いて、生徒がなだれ込んでくる。

〈遅れた！遅れた！！〉

〈ラッキー、先生はまだ来てない〉

そんなE S L生たちと龍一の目が合う。

〈転校生？ウェアユーフラム？（どこから来たの？）〉

「えっと」

ごめん、まったく聞きとれん…

龍一が困っていると、黒髪の女の子が更に英語で聞いてきた。

〈どこ？中国？韓国？アジアの方だよね？〉

国の名前を並べてくれた。

〈アイムフロムジャパン！！〉

龍一は英語（思いっきりカタカナ発音）で、答えた。

〈オー、ジャパン！ニンジャ、スシ、テンプーラ…〉

近くにいた金髪男子が日本の単語を言ってくる。

〈サ…センキュー〉

とりあえず、お礼言っておけ。

そうこうするうちに、再び扉が開いた。さらに数人遅刻？であろう生徒が何人か入ってくる。周りの生徒に囲まれて数分、三度扉が開く。

〈みんな、ゴメン。授業始めるから席ついて〉

先生…まさかの大遅刻ですか…

赤毛の女の先生が入ってくる。

〈ウォ！〉

先生が龍一を見つけて、大げさなリアクションを取る。

〈ユー▲※☆△〉

な…なんて言っているのかさっぱりわからん。

急に手を引っ張られ、教室の前に連れ出される。

〈みなさん。新しく来たりユーイチです。仲良くしてあげてね〉

Yes, Ma'am（ハイ、先生）

龍一の新たな学校生活が始まった。

第6話 初登校（後書き）

なかなか日本語を教えるまで行きませんね…
タイトル「日本語教師」なのに…

もうしばらく、日本語を教える段階まで気長に待っていてください。

第7話 **M a n g a & a m p ;** おにぎり(前書き)

「」↓日本語の発言を日本語表記で

へへ↓英語の発言を日本語表記で

書いています。

第7話 Manga & amp; おにぎり

へリユーイチ、一緒に食べない?」

声をかけてきたのは、つい先ほど終わったばかりの授業で隣の席だった^{ケイト}Kateだ。ケイトはオーストラリア国籍の生徒である。ちなみに今はランチタイムだ。

「ああ、良いよ。そう言えばみんな昼飯どしてるの?」龍一が英語で聞く。

「大体は購買でパンとか買ってるかな。あとは、家から何か持ってきてる人もいるみたいだけど…」

「なるほど。俺も家からbento持って来ただけ」

「bentoって何」

「ええと…ランチボックスかなあ? 家から食べる物を持って来ただけというか…」

「そう言うとな龍一は、おにぎりを取りだした。今朝母から渡されたものだ。」

「ワオ! rice ball!! 漫画で見たのとおんなじね!!」

ケイトが興奮して言う。

「えっ? 漫画?」

「イエース。日本のマンガ大好きなの! 例えばDoraemonとかCase Closed! とか…」

「ん? Case Closed?」

「そう。日本のマンガだから、日本語で読みたいのよ。」

「ドラえもんは知ってるけど、Case Closedって何?」

「エー!! すごく有名なのに知らないの? ひょっとしてマンガとか読まないとか?」

「いやあ、日本にいるときは大抵のマンガは読んだよ。だけど、Case Closedってのは知らないな」

龍一はマンガもある程度は読んでいるつもりである。ということは、よっぽど、マニアックなマンガなのだろうか？

「へちなみに、こういったマンガ？ストーリーとか」龍一がケイトに聞く。

「エーとねえ…探偵ものかな。高校生の男の子がある悪の組織によって、子どものからだになっちゃうの。で、小学生になった状態でいろんな推理ショーして解決していく…」

「ちよっ…ちよっと待て！それ名探偵コナンじゃん。」

「へ？今何て言ったの。」ケイトがはっとして聞く。

「いや、だから名探偵コナン。ええと…Detective Conanだよ」

「日本じゃDetective Conanって言うんだ！」ケイトが叫んだ。それにつられて、周りからの視線が集まる。

「あ…ゴ、ゴメン。」ケイトが謝る。「ねえ、そのrice ballひとつもらっていい？代わりに私のサンドウィッチあげるから。」

「ああ、良いよ」龍一は2つ目のおにぎりをつかみながら、答えた。ちなみに今食べているのは鮭だ。さっき食べたのが昆布だったから、ケイトが取った残りは、そう「梅干し」である。

ケイトはおにぎり初体験である。はたして初めてのおにぎりのお味は…？

「じゃあ、日本語後で教えてね」そう言うと、おにぎりを一口かじった。

「ウッ！」

ケイトが顔をしかめた。恐らく梅干しを食べたのも初めてだったのだろう。龍一の目の前で涙目になりながら、おにぎりを食べているケイトがいた。

第7話 Manga & おにぎり（後書き）

藤子F不二雄氏のドラえもん・青山剛昌氏原作の漫画『名探偵コナン』は、英語での対訳本が出版されています。名探偵コナンの対訳本のタイトルが”Case Closed!”となります。今回、この漫画を選んだ理由は、作者が英語対訳本も数冊所持しているからであり、特に他意はありません。

第8話 日本語堂々巡り（前書き）

400アクセス超えました。

「」↓日本語での発言をそのまま日本語表記で
へへ↓英語での発言を日本語表記に瞬時翻訳で
書いています。

第8話 日本語堂々巡り

へうつゝ：酸っぱい。何これ？ r i c e b a l l ってこんな酸っぱい食べ物だったんだ：ゝ

梅干しのおにぎりを食べたケイトが言う。

へい：いや、具が梅干しだったからね。酸っぱいのは梅干しであつて、おにぎり全般が酸っぱいわけじゃないから。ゝ

龍一がケイトのあらぬ誤解に対して苦笑いしながら説明する。確かに、梅干し初体験の人にとっては、衝撃的な味だろう。

へところで：日本語勉強したいの？ゝ

ケイトの言葉を思い出し、そう言えばと聞いてみる。

へうん、やっぱり日本語の原作を読みたいもん。ね、日本語って難しいの？易しいの？ゝ

ケイトの言葉を龍一は不思議に思う。

へうーん、俺は日本人だから普通に使っているけど：でも、何かで日本語は世界一難しい言葉だって聞いたことはあるんだよね：ゝ

へ私もそれは聞いたことあるんだ。こないだ、大学で日本語を勉強している知り合い2人に聞いたんだけど、2人ともまったく反対の答えだったの。ゝ

へと、いうと？ゝ 龍一は興味を持って聞いた。

へえつとね、日本語を勉強して4年目になる人は、すごく難しいって言ってた。でも、今年から勉強し始めた人はとっても簡単だって：まあ、2人ともかなりのオタクだけど：ゝ ケイトは友人の兄弟が言っていた事をそのまま龍一に投げかけた。

まさか、日本語は簡単だという意見が出てくるなんて思ってもなかったため、素直な驚きだ。日本語は難しいのか簡単なのか、あるいはどちらでもあり、どちらでもないのか？ 龍一は、簡単だという根拠を考えた。

（うーん、日本語のどういったところが簡単なんだろ：少なくとも

文字は3種類あるし、漢字何て日本人の俺でさえ読めないのもあるんだから難しいだろうな。文法もあんなややこしい用語とか「かろ・かつ・く・い・い・けれ」みたいなややこしいし、何段活用の未然形がどうのこうのとか、頭混乱するだろうしな）龍一は国語の時間に勉強した国文法を思い浮かべた。彼自身、国語は得意だったが、国文法ほど厄介なものはないと思っている。

（と：すると、発音か？）

龍一の頭は堂々巡りになっているが、考えながらケイトに聞いた。

「その簡単だって言った人は、日本語の何が簡単だって言ったの？」

「うーん、確か文法は規則的で分かりやすいって」

「えっ？文法？」龍一は驚きを隠せない。

「それと、発音も少し難しいところもあるけど、他の言葉と比べると音が物すごく少ないから楽だって言ってたよ。」

龍一は明らかに動揺していた。日本語の発音はともかく、あの未然形とかのややこしい国文法が外国人にとって簡単だとはとても思えない。

そう、実はひとつ大きな勘違いを龍一はしているのだ。ケイトの知り合いが言う、文法とは、龍一たち日本人が学校で学んできた「国文法」とは、似ているがまったく異なる「文型文法」あるいは「日本語文法」と呼ばれるものだからである。

勿論、今の龍一はその事を知らない。

第8話 日本語堂々巡り（後書き）

参考文献..

小栗佐多里& a m p; トニー・ラズロ（2005）『ダーリンの頭
ン中 英語と語学』メディア・ファクトリー 152—157頁

国語教育プロジェクト（2001）『原色シグマ新国語便覧 増補
改訂新版』文英堂 330頁

次回はコラムを投稿予定です。

評価・感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0347y/>

高校生日本語教師

2011年11月18日06時50分発行